

ねえ、マスター

Order 1 マンハッタン



大城

おおしろ

竜流

たつる

(1)

遠く^{じゅうせい}銃声^{じゅうせい}が響いた。1発、2発。

台風から変化した温帯低気圧が今夜、関東地方の太平洋沿岸を通過するらしい。夕方から降り始めた雨は日付が変わる頃から激しさを増し、いまは店内に流れる何のひねりもない『クレオパトラの夢』を時折かき消すほどだ。それでも記憶に^し沁みついた音は聞き違えるはずもない。俺はグラスを磨く手を止めて耳を澄ませた。

3発。近付いている。今度は音以外の感覚も届いた。おぞましくも懐かしい^{なつ}気配。殺意だ。

閉店時間の25時を30分ほど過ぎてている。スタンド看板をしまつてドアを^{せじょう}施錠する作業を、土砂降り^{どしゃぶ}を理由に後回にし、洗いものを優先させたことを後悔したが後の祭だった。アスファルトに浮いた水溜りを^{けち}蹴散らす、不規則な足音が迫る。

(1人。追われている。負傷している)

そこまで読んだとき、飾り物のカウベルが微かな^{かな}金属音を奏でた。肩で押しのけるようにドアを開き、わずかな^{すきま}隙間をくぐり抜けて瘦せた男が店に入ってくる。オーダーメイドらしいスーツが雨水を吸って台無^{だいな}しだった。クリーニングに出しても無駄だろう。肩には小さな穴も開いている。穴は服の「中身」にも達しているらしく、だらりと下げた右腕を袖口^{そでぐち}まで染めた血は、足元に赤黒い滴を落としていた。手のひらに隠すように握られた銃身の短いリボルバーだけが^{こうちゆう}甲虫のように鈍く輝き、^{せいさい}精彩を放っている。男の血走った目が俺に向いた途端、^{はな}血の気の失せた顔がなぜか戸惑うように緩んだ。

「いらっしゃいませ」

条件反射で、間抜けな^{あいさつ}挨拶^つが俺の口を衝いて出た。

1分も待たずに、3人の団体客が、派手にドアのカウベルを鳴らして現れた。^{せんきゃくばんらい}千客万来はけっこうだが、迷惑なことに売り上げに^{こうけん}貢献しない連中ばかりだった。

「ヤツはどこだ？」

^{ひととお}一通り狭い店内に目を走らせると、一番体格のいい男が言った。俺はグラスを磨きながら無言で彼らを見回す。地味なスーツ、安物の皮ジャン、着古したパーカー。服装はカタギを装っていても、^{ぜんかも}面構えは前科者のカタログだった。

「痛いメみたくなきゃトットと答えろバーテン。こっちは一刻を争うんだ」

^{おど}「そう脅すんじゃねえよ。悪いねえマスター、うちの若い者は気が短くてね。キレられると店の修理でしばらくは閉店になる。お互いに時間は有意義に使おうや」

体格のいい皮ジャンを、スーツ姿の男が宥めた。3人の中では一番年かさだ。^{けなげ}健気にも^{こうなん}硬軟の役割分担を演じているらしい。下手な^{ちゃばん}茶番に笑いをこらえていると、不意に男が首を傾げて俺の顔を覗き込んだ。

「てめえ……どっかで見たツラだな」

万が一思い出されると少し面倒なことになる。内心うろたえたが、すぐに心配はなくなった。

「オヤジさん、血っす！」

パーカー姿の若い男が、子供っぽい声を張りあげた。得意顔で指差した床の上、赤いシミが点々と、カウンター横のドアまで続いていた。スーツの男が赤いシミを追ってドアを開く。奥へ続いた赤いシミは、右手のトイレと物置を^{すどお}素通りし、開け放った裏口のドアから外を目指しているはずだ。店の裏はビルをぬって走る迷路のような細い路地。無口なバーテンに興味を失った3人は、目配せすると足音も荒く裏口を抜けていった。

俺はカウンターの裏側へ隠したトマトジュースの缶を手にとって、^{ぎそうこうさく} 偽装工作の^{ざんがい} 残骸を飲み干した。

「さて、ラストオーダーだ」

洗ったばかりのミキシンググラスに、もうひと働きしてもらわなければならない。

(2)

俺の店『CAFE RICK'S』は上野恩賜公園うえのおんしこうえんに近い裏通りに面している。大通りから外れた一方通行の路地で、日が暮れると薄暗い閑散かんさんとした街の片隅。築25年の寂れたビルさびの1階で細々と営業している。ロッジをイメージした板張りの内装。スツールが4脚並んだカウンターの他には、4人掛けのボックスが2席、2人掛けが3席の狭い店だ。

男たちが出ていったドアの反対側、カウンターの端にホールと行き来するためのスイングドアがある。すぐ内側には2階へ通じる狭くて急な階段。上は住居兼倉庫になっている。と言っても、人間様の居場所はベッドと事務机とユニットバス程度。ほとんどのスペースは酒や業務用食料品が詰まった段ボールせんきょに占拠され、倉庫で寝起きしているようなありさまだが、不自由を感じたことはない。

氷とライ・ウイスキー、スイート・ベルモットとアロマチック・ビターズをミキシング・グラスに放り込み、バースプーンでステアしながら階段を上った。

踊り場おどばで壁に背をあずけ、痩せた男やが気を失っている。

手入れのいい髪を掴んで顔を上に向け、苦しそうに呼吸する半開きの口へ、ミキシング・グラスつかから直に酒を流し込んだ。カクテルグラスは省いたが、様式美はぶにこだわっている状況ではない。

失礼なことに男は、せっかく口に含ませたカクテルを猛烈な咳とともに嘔き出したふだ。それも長くは続かなかった。咳き込むたびに撃たれた肩に激痛にらが走るらしく、のたうちながら苦勞して呼吸を整えて、俺を睨みつける。

「……………なんだ、これは！」

「マンハッタン——ライ・ウイ・スキーとスイート・ベルモット、アロマチック・ビターズをステアしたカクテルだ」

「そんなこと聴いてるんじゃねえ！　なんで、俺に、そんな酒を飲ませた？」

「伝説では、メリーランド州のバーテンダーが、撃たれたガンマンきつの気付けのために発明したと言われている」

長年、試したいと思っていた。だが酒が揃っているときに撃たれたガンマンは存在せず、撃たれたガンマンがいるときは必要な酒がなかった。いつも、そうだった。だから、こんなチャンスそろは滅多にない。俺は男の顔を覗き込んだ。

「で、どうだった？　やはり、撃たれて飲むマンハッタンの味は格別かくべつか？」

「知るか……………俺は酒が飲めない」

お粗末な結果だ。チャンスには恵まれたものの被験者に恵まれなかったらしい。そうと分かれば用済みだ。俺は物騒な怪我人に背を向けて階段を下りた。

「もう少し辛抱しんぼうだ。いま救急車を呼んでやる」

「余計なことするんじゃねえ」

物憂げものうな声とともに、うなじの一点が痺れる感覚が届く。振り返ると案の定、銃口しびがこちらを

向いている。撃鉄は起きていないが、愉快的状況ではない。

「病院に担ぎ込まれば傷が銃創だと知れる。問答無用で通報だ。それでなくとも尻に火が付いている。警察の相手してる余裕はねえ。こっちの立場も考えろ」

「桐島………だったな？」

指定暴力団〈仁龍会〉系の下部組織〈角崎興業〉——桐島はその組織の構成員だ。〈角崎興業〉は上野広小路一帯を縄張りに「シノギ」を展開していて、俺の店も形を変えた「みかじめ料」を僅かながら払っている。武闘派色を抑えた〈角崎興業〉の中でも桐島は頭脳派で売っていた。私大ではあるが経済学部出身のキレ者で、30代にして若頭補佐とかいう役職に就いている。年は俺より少し上だが、収入ははるかに上だろう。

「ヤクザ者の立場など知ったことか。こっちは客商売だ。『ヤクザが死んだ店』なんて評判が立ったら廃業するしかない」

俺は桐島に向き直り、詰め寄った。手首だけで狙っていた拳銃を反射的に突きつけようとして、傷に痛みが走ったらしく、彼は一瞬動きを止めた。おかげで難なく拳銃を上から押さえこみ、シリンダーを固定できた。これで引金は引けない。発砲の意思はないと分かっていたが、予期せぬ暴発事故は決して少なくない。俺はもう一方の手で桐島の内ポケットを探り、小振りのフォルディング・ナイフを抜き取る。服のしわから刃物を呑んでいると読んでいた。片手で刃を開き、桐島に斬りつける。

一連の動作を、一呼吸で行った。

血で汚れたスーツの袖が縦に裂ける。皮膚を傷つけるようなヘマはしない。

「とりあえず傷の状態を確認する。話はそれからだ」

考えてみれば飲食店に救急車が乗りつければ周囲は食中毒を疑う。それに警察に関わりたくないという点では、俺もヤクザ者と大差なかった。

上腕部の筋肉が一部、えぐれている。だが見た目ほど深刻な状態ではなさそうだ。弾は抜けているし、骨も太い血管も外れている。ならば通常の貫通銃創より治療がしやすい。出血がひどいのは雨の中を走り回ったせいだろう。圧迫止血で済むはずだ。すぐ応急処置に取りかかる。傷口は洗浄、消毒してワセリンを塗り、滅菌ガーゼで保護し、じちゃくせいほうたい 自着性包帯で固定する。同じ包帯で今度は腕の付け根を幾重にも巻き、ボールペンを通して捻る。

「これで脇の下を通る太い血管が締まり、しばらく待てば血は止まる。ただし20分ごとに5分、包帯を緩めろ。それを怠ると壊疽をおこして腕が腐り落ちるぞ」

「なれたもんだな………傷の処置も、銃やナイフのあしらいも」

俺の顔を覗き込む桐島を無視し、2階へ上る。使い古しの寝袋を探し、ついでに薬箱からこうせいざい 抗生剤のピルシートを取り出して踊り場に投げた。

「化膿止めだ、飲んでおけ。今夜は発熱と痛みで苦しむはずだ。2階のベッドを使っていい。俺は店のベンチで寝る」

「なあマスター………さっき店のドアを開けたときから、あんたに見覚えがある気がして仕方ないんだが………」

「気持ち悪い。そんな台詞は安っぽいスナックでホステスを口説くときにでも吐くんだな」

「^{しまが}誤魔化すんじゃねえ。俺たちは昔、どっかで会ってるはずだ」

言って桐島が睨みつける。面倒な展開だった。聞かなかったこととして階段を下り、店に戻る。

壁に造り付けられた木製のベンチシートに寝袋を放り投げ、『CAFE RICK'S』の店名が印刷された紙マッチで煙草に火をつける。寝酒代わりに、安バーボンをショットグラスであおった。それでも、^{よみがえ}蘇^{しょうえん}った^{しょうえん}硝煙の臭いは消えることがなかった。

(3)

午前11時、『CAFE RICK'S』の店名が入ったスタンド看板を出す。

夜のバー・タイムだけでなく、ランチ・タイムも店は開ける。店の稼働率^{かどうりつ}を考えてのことではない。開店を夜まで待ってられないだけだ。何かしていないと落ち着かない。毎日、何かに追われるように料理を作る。シェーカーを振る。

日替わりメニューは1種類。その他はピラフ、ナポリタン、ピザなどバー・タイムと共通の軽食。15人も入れればいっぱい^{しなぞろ}の店だ。この程度の品揃えなら、満席になったとしても1人で店を回せる。

ウイングカラー・シャツの袖をまくり、胸あてタイプのカフェ・エプロンをつけた。ランチタイムの正装だ。夜のバータイムになるとソムリエエプロンとなり、ベストを身につける。

バックバーの裏には小じんまりした^{ちゅうぼう}厨房があり、最低限の調理設備がある。それで充分^{じゅうぶん}だった。設備も食材も絶望的な屋外で、数十名の食事をでっち上げたことも一度や二度ではない。

店内の壁には店名の由来にもなった、古い映画のポスターが飾られている。『CAFE RICK'S』の数少ない、そして最大の^{そうしよくひん}装飾品だった。

「今日もよろしく。店長」

パネルの中でたたずむ、中折れ帽を目深にかぶったトレンチコートの男に挨拶し、また1日が始まる。

「銃声が聞こえたって通報があつてな……」

ランチメニューの〈レバーソテーのトマトソース〉セットを食いながら^{ごうだ}郷田が言う。上野警察署・刑事課・保安捜査係の刑事だ。およそ「ツキイチ」のペースで、大抵はランチタイムの終了間際^{まぎわ}、思い出したように来店する。カウンターごし、自問自答するように郷田が経緯を語った。

「で、今朝から周辺^{じど}を地取りしてたんだが、どうも〈角崎興業〉の動き^{あわ}が慌ただしい。探してみると昨夜から若頭補佐の桐島が姿を消しているらしいんだが……」

「嫌だな……暴力団の抗争でも始まるんですかねえ？」

知らない振りで核心を突いてみたが、郷田の反応は鈍かった。ひとしきり^{うな}唸って、首を傾げる。

「それは考えにくいな。この一帯は〈仁龍会〉系の〈角崎興業〉が仕切っていて、勢力地図は安定している。もっとも、10年ほど前に近畿から^{とうざいれんごう}〈藤齊連合〉系の^{くまくらぐみ}〈熊蔵組〉が湯島に進出して一時期、抗争を展開していたのは確かだが」

「初耳だな」

「5年前、この^{かいわい}界限でも派手な撃ち合いがあった。抗争に巻き込まれた若い会社員が1人、流れ弾に当たって命を落としたっけ。全国的なニュースになったが、覚えてないかマスター？」

「この店を始めたのが4年前だね」

「そうか、上野にいなかったか」

無言でうなずいた。上野どころか日本にすらいなかった。食事を終えた郷田にセットのコーヒーを出してやると、煙草に火を点けて昔話を続けた。

「あれが最後の抗争だったな。以後5年間、現在まで休戦状態だ」

「手打ちは済んでいると？」

「いや、〈熊蔵組〉にしてみれば〈角崎興業〉のシマを獲るには稼ぎ頭の桐島を消しちまうのが一番だ。その状況は昔も今も変わらない。ただ桐島が異様に用心深いってだけさ。シノギの道具はパソコンとスマホの経済ヤクザだ。滅多に事務所からは出ない。移動のさいは防弾ガラスと装甲板 てんこ盛りの特注車で、しかも数名の『弾よけ』がガードする。酒が飲めないから夜はセキュリティの嚴重な高級マンションに籠ってる」

「攻めあぐねているうちに諦めたってところか」

「天敵 だからって四六時中つけ狙っているほどヤツらも暇じゃない。少しでもシノギを増やして組織を運営していかなきゃならないから、どうしたって切った張ったは片手間になる。稼ぎよりメンツを優先するヤクザなんて、もう映画の中にしかないのさ」

何か気付いたら上野署へ連絡へ入れるよう命じて、郷田は話を切り上げた。携帯電話の番号も伝えないところを見ると、今回の件に執着 しているわけではないらしい。いつものことだ。彼が来店するのは目先の仕事のためではない。もちろん食事のためでもない。別な目的がある。武道で鍛えた体格をたたむようにスツールへ納まり、カウンター越しに俺を盗み見る気配で、それは伝わってくる。ある意味で分かりやすい男だった。

「なあマスター。前から聞こうと思っていたんだが、俺たち昔、どこかで会ってないか？」

不意を突いた郷田の問いを、一瞬どう誤魔化そうかと迷ったが、都合よくボックス席の客が会計に立ったので曖昧にうなずき、レジに逃げた。

他人から「見覚え」を打ち明けられることは珍しくなかった。不可抗力とはいえ、顔を売りすぎた。大半の日本人は、俺の顔を見た記憶があるのだろう。思い出せるかどうかは別にしてだ。おそらく郷田は、おぼろげな記憶と刑事としての職業意識から、俺を手配中の凶悪犯とでも勘繰っているのだろう。

その後も片付けや洗いものに忙殺されるフリをしているうち、郷田も俺の返答を諦めたらしく、カウンターに必要な分だけの小銭を置いて店を出ていった。

(4)

階段の踊り場が、すっかり桐島の定位置になっていた。

昨夜も、せっかく空けてやったベッドを使わず階段で夜を明かしたらしい。敵を警戒してのことかと思えば、「他人の寝床が気持ち悪かった」とほざく始末。^{けっぺきしょう} 潔癖症 のヤクザもいたものだ。

「郷田のダンナに俺のことを喋らなかつたことは、いちおう礼を言っとく」

「必要ない。客の前で捕り物をされたくなかつただけだ」

いまま桐島は踊り場に腰を下ろし、壁に背をあずけている。ひとつ上の段に、日替わりランチのプレートがほとんど手つかずで放置されていた。

「それより、おまえの血が足りないだろうと思って、わざわざランチメニューの素材にレバーを選んだんだ。熱で食欲がないのはわかるが、少しは食べたほうがいい」

「食欲以前に、肉が嫌いなんだよ。俺はベジタリアンなんだ」

言われてみれば、付け合わせのポテトやキャロット・グラッセ、サラダはきれいにたいらげている。メインのレバーステーキだけが無傷のまま存在を否定されていた。どこか^{しゃくぜん} 釈然 とせず、俺は店名の入った紙マッチで煙草に火をつけた。すかさず桐島が当然のように権利を主張する。

「おい、俺の前で煙草は吸うな」

「酒も煙草もたしなまず、おまけにベジタリアンか？ ^{ぼうず} 坊主になれるぞ。転職したらどうだ」

鼻で笑っても皮肉は伝わらない。桐島は平然とうなずくだけだ。

「健康には気を使ってる」

「ヤクザの^{ぶんざい} 分際 で長生きするつもりか。虫のいい話だ。いいこと教えてやる。アルコールやニコチンや中性脂肪より、銃撃戦のほうがはるかに健康に悪い」

「好きで撃ち合ったわけじゃない」

桐島は店に転がり込んでから初めて、ウンザリした顔で弱音を吐いた。

「いつまでここにいてるつもりだ桐島。いまの時間帯なら、こんな裏通りでも人出はある。おまえを狙っていた連中もおいそれと^{しゅうげき} 襲撃 できないはずだ。組事務所に連絡して『弾よけ』でも装甲車でも迎えに来させたらどうなんだ？」

「昨夜のヤツら——〈熊蔵組〉の構成員だが——連中は待ち伏せしていた。休戦状態が続いていたとはいえ、俺も警戒は怠らなかつた。少なくとも、毎日の行動をパターン化するような下手なマネはしなかつた。俺の動きを把握できるのはごく一部の人間だけだ」

「結局は身内も信用できないってわけだ。あんたらが交わす『^{さかずき} 盃 』ってやつは、その程度の重さしかないのか」

桐島は苦笑して^{うなず} 頷 いた。そして東の間^{つか ましゅんじゅん} 逡巡 してから、思いきるように、^{ふところ} 懐 からやや幅広の茶封筒を取り出す。

「マスター、ちょっと使いを頼まれてくれないか？」

封筒には^{むこうじま} 向島 の住所と集合住宅名、そして女の名前が手書きで記されている。中身は紙幣の^{しへい}

束だと容易に想像できた。金額は不明だが封筒の厚みから、俺にとっての〈大金〉と桐島にとっての〈はしたカネ〉の中間だろう。事情を推し量^{お はか}るべく視線を向ければ、桐島はなぜか照れたように目を逸^そらす。

「女に、金を届ければいいのか？」

「ああ。だが、俺の行動が読まれていたなら、昨夜の連中、〈熊蔵組〉の構成員が女のアパートで網を張っているかもしれない。奴らの目に留まれば、マスターが俺をかくまったことがバレる。そうなったら、タダじゃ済まない」

「承知した」

うなずいて、俺は封筒に手を伸ばす。だが桐島は手放そうとしなかった。札束の入った封筒の両端を握って睨みあう。

「なぜ引き受ける？ 下手すりゃ暴力団を敵に回すんだ。最悪、命にもかかわる。普通は断るだろ？」

言われてみればその通りだった。たとえ暴力のプロだろうがしょせんは日本人と高をくくっていた。そんな内心を見透^{みす}かすように、俺の顔を覗き込んで桐島が詰め寄った。

「日本のヤクザなんざ敵じゃねえってツラだな……さすがはフリーハンドだ」

とぼけようとしたが間に合わなかった。動揺^{どうよう}が顔に出た。

フリーハンド——その名で呼ばれたのは数年ぶりだ。

「凶星^{ずぼし}……のようだな」

どうやら鎌^{かま}をかけられたらしい。俺はまんまと引っ掛かったわけだ。だが目当ての答えを引き出したはずの桐島が、まだ信じられないように首を傾^{かし}げていた。

(5)

ランチタイムの後は 珈琲^{コーヒー い}を淹れるのが日課だ。

アメ横の専門店で買った生豆^{きまめ}をフライパンで煎^いるところから始める。焙煎^{ばいせん}した豆は手動のミル^ひで挽き、ネルのフィルターにおさめ、銅製のドリッパーにセットし、専用のケトルで湯を注ぐ。ローストした豆から逃げた香りが店内を満たし、ランチタイムの残り^{のこ}香^がを中和^{あぶら}する。脂^{あぶら}の焼けた匂いや穀物を加熱した香りも嫌いではないが、夜のバー・タイムにカクテルやワインやシングルモルト・ウイスキーを楽しむ客には邪魔な要素だろう。

カップにコーヒーを注ぎ、カウンターの桐島に提供した。一口すすって、水中から顔を出したように深い呼吸をする。文句が出ないということは、気に入ってもらえたようだ。アルコールもニコチンも受け付けなくせに、カフェインは許容範囲らしい。バー・タイムの6時まで店は閉める。ドアは施錠するし、明かり取りの小窓にもカーテンを引く。命を狙われるヤクザ者でも、気を許せる場所と時間は必要だ。ほんの僅かだとしても、必要だ。

「昔、あんたと会ったことがある——昨夜そう言ったが、勘違いだったようだ。俺たちは会^{つら おが}っちゃいない。俺が一方的にあんたの面を拝んだんだ。テレビの、ニュース番組でな」

聞こえないふりで、自分のカップにコーヒーを注ぐ。桐島はひとしきり無反応な俺を睨んでいたが、やがて記憶をたどりながら独りで喋りはじめた。

「10年ほど前だったか、イラクで輸送業務にあっていたイギリス警備会社の車両が、イスラム武装勢力^あの襲撃に遭い、日本人の従業員1名が拉致された。武装勢力はその日のうちにインターネットで犯行声明を出した。身代金等の要求はなく、人質を即日、無条件で処刑^{むね}する旨を発表した。で、犯行声明には画像^{てんぶ}が添付されていたんだ。跪^{ひざまず}いた日本人の青年に、覆面^{ふくめん}の戦闘員がイスラム風の装飾がほどこされた半月刀を突き付け、背後にはそれぞれアサルトライフルとロケット砲^{ひか}を手にした迷彩服姿の男二人が控えた写真だ。勇ましくもおぞましい画像は緊急特集扱いで、ニュース番組を中心に日本全土へ流れた。ほとんどの国民は続報を待った……マスター、どんな続報が流れたと思う？」

相手にするのは本意ではなかったが、桐島の見え透いたブラフ^{しゃく さわ}が癢^{しゃく}に触るので、後から聞いた話を口にした。

「続報なんて流れなかった」

桐島の言う〈日本人従業員拉致事件〉は昼のニュースで全国に流れた。だが、その日の午後に当時の厚生労働大臣の不倫疑惑が発覚し、夜のニュースは与党大物議員のスキャンダルー色となり、哀れな日本人拉致被害者の存在は忘れ去られた——そう、帰国してから噂に聞いた。

桐島はひとつうなずくと、話を進めた。

「誰もが暗黙^{あんもく りょうかい}の了解^{しっこう}のうちに、犯行声明通り処刑は執行されたと考えた。だが一方で奇妙な都市伝説も生まれた。拉致された日本人が、じつは生きていたって噂だ。いや生きていただけじゃない。監禁されていた武装勢力のキャンプから、単独自力で脱出した——しかも丸腰で、戦闘員^{むりょくか}十数名を無力化して——そんな伝説を信じる者たちは、武器も持たずに武装勢力のキャン

プを半壊はんかいさせた日本人を『フリー・ハンド』と呼んだ」

桐島が俺を見据えて反応をうかがう。せめてもの抵抗に店の紙マッチで煙草へ火をつけたが、話を逸らすことはできそうになかった。

「続報がなかったのは政府がマスコミに報道規制をかけたせいだろうな。日本は自衛隊を微妙な立場のままイラクへ送り込んでいた。そんな状況でマスター、あんたの生還せいかんは〈強い日本〉、〈好戦的な日本〉の状況証拠じょうきょうしやうこになりかねない。〈なかったこと〉にしたいのはイスラム武装勢力も同じだったろう。たった1人の日本人にベースキャンプを壊滅かいめつさせられたと知れば、世界中のテロリストから笑いものだ」

言うべきことを言ったのか、桐島が口を閉ざした。途端とたんに沈黙がのしかかる。ランチの終了とともに音楽を止めたことを悔やんだ。こんな日に限って雨も降らず風も吹かず、大通りの遠い喧騒けんそうは静寂せいじゃくのコントラストを強調して返答を迫る。

「750円だ」

煙とともに吐き出すと、桐島は首を傾げた。

「なんだと？」

「おまえの気付けに作ったカクテル——マンハッタンの代金だ。それを払えば、おまえはこの店の客だ。カクテル1杯げこだろうと、下戸のヤクザだろうと、客は客だ。助けを求められれば、できる限りのことをする。俺にできることをする」

黙って何度かうなずくと、桐島は懐から札束の入った封筒を、ズボンのポケットから小銭を取り出し、カウンターに並べる。

「頼むぜ、マスター」

桐島にうなずいて、2種類の金を両手に掴む。握りしめた小銭は、札束より重い。

冷蔵庫の扉で、キッチンタイマーを兼ねたデジタル時計が午後3時12分を表示していた。いま出れば桐島の〈使い〉を済ませて、6時からのバー・タイムには戻れるだろう。よほどのことがなければ。

スイングドアを抜け、カウンターの桐島を回り込んで裏口へ通じるドアを開く。トイレ奥の物置。古い衣類を詰めた段ボールをかき回し、着古したM-65フィールド・ジャケットを探り当てた。カフェエプロンを脱ぎ捨て、ウイングカラー・シャツの上から袖を通す。色あせたオリーブグリーン。懐かしい重量感。

俺は裏口から細い路地へ飛び出した。

(6)

銀座線ぎんざせんと東武伊勢崎線とうぶいせざきせんを乗り継いで向島へ向かった。

桐島の、そして世間の認識は、事実と若干のズレがある。イラクで武装勢力に襲撃された〈警備会社〉だが、施設巡回や現金輸送業務を主とする日本の警備会社とはだいぶイメージが違う。むしろPMC（プライベート・ミリタリー・カンパニー）と呼ばれる民間軍事企業に近い。本社所在地のイギリスと軍事同盟関係にある欧米諸国の軍から依頼を受け、軍事作戦における後方支援こうほうしえんサービス全般を提供する組織だ。内容は派兵先はへいの基地設営や物資の輸送、要人警護から、施設の清掃やメンテナンス、クリーニングなど多岐はたきにわたる。正確には軍が直接業務委託するのは大資本の巨大PMCで、俺が働いていた警備会社は下請けしたうにすぎない。しかも正式な従業員ではなく、臨時雇いりんじやとの料理人だ。戦争や軍隊からはほどおほどとお程遠い。

俺はイギリスでパブ巡りの放浪中ほうろう、警備会社の管理職を名乗る男に声をかけられ、割のいいバイトとして気軽に引き受けた。あんなことになるとは夢にも思わずに。

当時、アメリカは大量破壊兵器保有ほゆうの言いがかりをつけてイラクへ侵攻しんこうし、各地にキャンプを設けて軍を駐留ちゅうりゅうさせた。キャンプといっても総面積は東京ドーム10個分にも及ぶ大規模なもので、キャンプ内にはショッピングセンターやスポーツジム、ネットカフェやヘアサロンなど何でもあり、ちょっとした街だった。俺の就労先は、そんなキャンプ内の食堂。学校を出たばかりのような若い米兵たちのため、料理を作る毎日だった。武装勢力から襲撃を受けたときも、食糧の輸送中だ。

キャンプには俺の雇い主のような、下請けの警備会社がいくつも参入していた。従業員の多くは軍隊経験者で、フランス外人部隊あがりや特殊部隊出身者など、傭兵ようへいと紙一重の連中も珍しくなかった。いずれも腕自慢で、何人か集まると実戦さながらの格闘訓練が始まる。俺も学生時代はフルコンタクト空手の経験があり、よく訓練に駆り出された。とは言っても、学生空手が戦闘のプロに通用するはずもなく、都合よく練習台に使われたにすぎない。何度強烈な打撃技に跪き、何度関節技せつに悲鳴をあげ、何度絞め技しに気を失ったかわからない。だが彼らの軍隊流格闘術を学ぶには、それが一番の近道でもあった。

指定されたアパートの100メートルほど手前で周囲を見渡し、比較的高い建物を探す。両側に理想的な位置でマンションと雑居ビルがあった。回り込むように移動し、マンションは非常階段の4階から、雑居ビルは3階共同トイレの窓から、目的地周辺を見下ろした。

「3人」

確認した。やはり見張られている。昨夜、桐島を追って店に踏み込んできた3人組だった。〈熊蔵組〉の構成員だろう。アパート正面に体格のいい皮ジャン。裏路地に年かきのスーツ姿。周辺を巡回じゅんかいするパーカーの若者。昼下がりの住宅地は閑散としている。3人以外におかしな動きはない。増援ぞうえんはないようだ。それぞれの位置と動きを頭に叩き込んで、ビルを駆け下りた。

まずはアパート正面の安全確保だ。移動しながらも無意識に武器になりそうなものを探す。難

しいことではない。その気になれば大抵の物体が凶器となり得る。武器は、いまここにある物すべてだ。走りながらコンビニのレジ袋を拾い、自動販売機でペットボトルのミネラルウォーターを買った。小型のペットボトルをレジ袋に入れて振り回せば使い捨てのブラック・ジャックになる。安上がりで、倒した相手に傷も残らない。最大のメリットは武器に見えないことだ。日本では武器を持つ者が逮捕される。戦場では武器を持った者から殺される。

片側一車線の道路をはさんだアパートの正面、皮ジャンの男がバス停横の電柱に寄りかかって、一服しようと煙草をくわえかけている。距離にして30メートル。顔を見られては面倒なことになる。遮蔽物しゃへいぶつになりそうなのは、男のすぐ手前ではためく防犯のぼり旗ぼただけだ。

(迷っているヒマはない。一気に接近する)

考えを行動に移しかけたとき、宅配便のトラックが追い越して行った。反射的に飛び移る。ステップに足をかけ、荷台扉に張り付く。左手で蝶番の突起をホールドし、右手にペットボトルの入ったレジ袋を下げ、武器に見えない武器の出番を待つ。黄色い防犯のぼり旗が見えた瞬間、飛び降りざま右腕を大きく横に振るう。ペットボトル入りのレジ袋が巻きつくように男の頭部ずがいを打った。鈍い音と感触。ひしゃげたのは頭蓋もではなくペットボトルだ。着地して、水の漏れだしたレジ袋を足元に放り、倒れかけた男を支えた。白目をむいて完全に意識を失っている。それでも元の姿勢を再現して電柱に背中をあずけると微妙なバランスながらも倒れることはなかった。俺は皮ジャンのポケットからサングラスを取り出して白目を隠し、路上に落ちた煙草を拾ってくわえさせた。マティーニのグラスにオリーブそを添えるように、素早く丁寧ていねいに。仕上げは両手を皮ジャンのポケットに突っ込めば、一服しようとしてライターを探しているようにしか見えない。

出来栄できばえに満足する間もなく、前後から気配はさうの挟み撃ちが来た。反射的に道沿いのブロック塀ぞべいを飛び越え、身を隠す。アスファルトを蹴る瞬間、無意識に視界の隅をよぎった防犯のぼり旗を掴んでいた。塀の内側は建売住宅の庭だった。庭に人の気配はない。犬を飼っていないのは臭いで分かる。

透かしブロックすから道路を覗き見た。

ひとつ先の路地から、年かさのスーツ姿の男が現れた。逆側からは集団下校の小学生の群れ。スーツの男は何か声をかけながら皮ジャンに歩み寄る。集団下校が近付いてきた。俺は手にした防犯のぼり旗の支柱からポリエステルいぶかの布を外し、丸めてフィールドジャケットのポケットにしまう。ポールの先端部を透かしブロックの穴に差し込み、ビリヤードのキューのように構えた。

声をかけても反応の無い皮ジャンを訝り、スーツの男がゆっくりと歩み寄る。小学生の群れも嬌声きょうせいを発しながら近付いてくる。

「おい、シカトしてんじゃねえよ」

スーツの男が皮ジャンを覗き込む。その背後を小学生の喧騒が通り過ぎる。

「どうかしたのか？」

まだ反応を返さない皮ジャンにようやく不審を抱いたか、スーツの男が肩に手をかけようとする。その瞬間、透かしブロックを通して、のぼり旗のポールを突き出した。先端が一直線に男の右肋下みぎあばらしたにめり込む。肝臓かんぞうへの一撃。スーツの男が微かに呻うめいて硬直した。俺は再びブロッ

ク塀を飛び越え、スーツの男の目の前に降り立つ。眼は開いているが、視線が定まらない。なんにも見えてはいないはずだ。レバーに強烈なダメージ喰らうと、視界がブラック・アウトする。鳩尾みぞおちに正拳突きを叩き込み、腹部迷走神経ふくぶめいそうしんけいにダメージを与えると完全に気を失った。遠ざかる集団下校を追うようにスーツの男に肩を貸して数歩移動し、バス停のベンチに座らせた。かたわらのゴミ箱から古新聞を拾って膝ひざに広げてやる。偶然か必然か、紙面は失業率の上昇を報じている。うなだれて世相せそうを嘆く中年男の完成だ。

残るは1人も長くは待たなかった。

集団下校の小学生と入れ違うように、パーカー姿の若者が両手にレジ袋さを提げて歩いてくる。買い出しにでも行っていたのだろう。

俺は顔を背け、バスを待つ素振りそぶで間近の停留所に立つ。

電柱にもたれる皮ジャンとベンチに座るスーツ姿。2人を目にとめて気を許したか、パーカーの若者が無警戒で歩み寄る。

「おやっさん、アニキ、ここにいたんすか。ちょうどよかった。メシっす」

当然、反応はない。パーカーの若者は2人へ交互に目を走らせながら足を止め、成す術なすべもなく戸惑っていた。やがて手近なバス停のベンチへ慎重しんちょうに歩み寄り、うつむいたスーツの男を覗き込んだ。

「あの一、おやっさん？」

自然体で、俺はバス停から歩み出る。反射的に振り向こうとした若者の頭部に、ポケットに突っ込んであった防犯のぼり旗の布を巻き付けた。パーカーの若者は、視界を奪った布を解こうともがくも、両手の指にレジ袋がからみついて自由にならない。俺は弁当の袋に手を入れて割り箸せんはいしゃくを2膳拝借し、若者の首を左右から挟み込んで頸動脈けいどうみやくを圧迫した。脳への血流が遮さえぎられ、やがて脱力した両手からレジ袋が落ちる。絞め落とした若者の顔からのぼり旗を外し、歩道に座らせて上半身をバス停のベンチへもたせかける。スーツの男が新聞に目を落とすすぐ横だ。

路上に放ったのぼり旗には「暴力団追放宣言」とプリントされている。ここまで活用すれば壊れたのぼり旗も本望ほんもうだろう。

俺は落ちたレジ袋を拾って、弁当やペットボトルを取り出し、まだスーツの男が熱心に新聞に目を落とし、パーカーの若者が寄りかかるベンチへ並べた。

電柱に背をあずけて一服しようとしている皮ジャン。バス停のベンチで新聞を読むスーツ姿。公共のスペースを占領して食事の準備にかかる礼儀知らずな若者。さほど違和感なく、〈休憩中の男3人〉が仕上がった。暴力団の構成員だろうと、違法な業務の遂行中であろうと、休憩は必要だ。

俺は誰の目も気にすることなく、アパートの外階段を上った。

(7)

ノックをすると待ち構えたようにドアが開いた。

閉じたチェーン越しに顔をのぞかせたのは30過ぎの女だった。小柄で華奢で、地味な見た目に違和感を覚えた。染めていない真っ直ぐな髪を後ろで無造作に結わえている。化粧っ気もない。ヤクザの〈囲い女〉にしては、いかにも地味だ。住んでいるアパートにしても、遠目には小奇麗だが実際に足を運んでみると目に見えて安普請と知れる。

「桐島という男から、これを届けるように頼まれた」

「桐島はどうなったの？」

差し出した札束入りの封筒に目もくれず、女が詰め寄った。勢いに面食らっていると、女は取り乱した自分を恥じたように声をひそめる。

「なぜ、桐島本人が来られないんですか、何かあったんですか？」

何かあったところではないが、余計なことを喋れば面倒なことになりかねない。何も知らない間抜けを装うのが無難だろう。

「あいにく俺は使いを頼まれただけで、詳しい事情を知らない。それに桐島と口を利いたのも昨夜が初めてだ」

虚実とりまぜて説明する俺に、女は探るような視線を向ける。不意に軽い足音が響いて奥の部屋へ続くドアが開いた。

「お母さん、桐島のおじさんが来たの？」

顔を出したのは10才ぐらいの少年だった。俺を一瞥して来客が「桐島のおじさん」ではないと知り、目に見えて落胆の色を浮かべる。少年にとって俺の存在意義がヤクザ者以下であるらしい事実直に直面して少なからず自尊心が傷ついた。半ば無意識に、あどけない表情に桐島の面影を探したが、これといった発見はない。女に目を戻せば相変わらず俺を観察していたが、先ほどまで瞳の裏側に漂っていた疑いは消えていた。

「彼は無事なの……いま、どこに？」

「悪いが詳しいことは言えない」

「待って、お願い……」

女が声を殺し、俺のフィールド・ジャケットを掴んだ。双眸から涙が溢れる。ひどく困惑している。何に迷っているのかまではわからない。わかるのは桐島の身を案じていること。それだけは嘘偽りがなかった。

上着を掴んだ細い指を丁重に外し、代わりに札束の詰まった封筒を押し付ける。女の頬に流れ続ける涙を無視し、一度もチェーンの外されることのなかったドアを閉じた。フィールド・ジャケットの下に着た、ウイングカラー・シャツの胸ポケットを探る。煙草をくわえ、店の名前と電話番号が印刷された紙マッチで火をつける。久しぶりに吸い込んだ煙が、胸と頭に沁みた。煙より女の涙が沁みた。女の涙より子供の落胆する顔が沁みた。

俺は店の紙マッチを、ドアの新聞受けにそっと落とした。

(8)

夕方から風が強くなった。また、台風が近づいているようだ。

吹き抜けるビル風が唸りをあげ、店内に流れる『ラウンド・ミッドナイト』を時折かき消す。客足も^{きょくたん}極端に鈍い。こんな夜に限って、閉店間際に^{いちげん}一見の泥酔客が単身転がり込み、ビール1杯で長居したりする。そんな面倒は避けたい気分だ。閉店時間の30分前でノーゲスト。今夜は早めに店じまいすることにした。面倒な客は、相変わらず階段の踊り場で息をひそめているヤクザ者1人でたくさんだ。

カウンターの隅にあるピンク電話が鳴った。

無意識に警戒する。こんな時間に店の固定電話を鳴らすのは、間違い電話か悪い知らせのいずれかだ。受話器を取った瞬間、間違い電話と決めつけた。耳に飛び込んできたのは、子供の声だった。

「そこに、桐島のおじさんがいるの？」

置きかけた受話器を、また耳に戻す。聴き覚えのある声。俺を見て〈桐島のおじさん〉が来たのではないと悟り、落胆した――その表情が^{のうり}脳裏をよぎる。今日、札束の詰まった封筒を届けた、桐島の〈女〉の子供。間違い電話ではないらしい。残る可能性は悪い知らせだけだ。俺は覚悟を決めて子供の声に^{かたむ}耳を傾けた。

「お父さんが死んだとき、10人ぐらいのヤクザが撃ち合った。だから、誰の撃った弾があたったのか分からない。なのに桐島のおじさんだけは謝りに来る。お父さんの月命日に、お金を届けてくれる」

何を言っているのか、^{とっさ}咄嗟に理解しかねた。子供特有の無意味で^{しりめつれつ}支離滅裂な空想話かとも思ったが、聞いているうちに郷田刑事の話が^{のうり}脳裏をよぎった。今日の昼、カウンターで日替わりランチを食べながら、暴力団の抗争に^{およ}話が及んだ。そのさい、5年前〈角崎興業〉と〈熊蔵組〉の抗争に巻き込まれ、一般市民が流れ弾にあたって死んだと語ったはずだ。

とんだ勘違いをしていた。

俺が札束を届けた相手は、桐島の〈女〉なんかじゃない。暴力団同士の抗争に巻き込まれて命を落とした、何の罪もない被害者の〈遺族〉だ。

電話ごしの子供の声に、^{おえつ}嗚咽が混じり始めた。

「はじめは僕もお母さんも、桐島のおじさんが来るたびに怖かったし、恨みもした。でも、だんだん怖さも恨みも薄れて、ここ1、2年は桐島のおじさんが来るのを楽しみにしてた。毎月くれるお金のおかげで不自由なく暮らせたけど、理由はそれだけじゃない。僕もお母さんも、桐島のおじさんが悪い人じゃないって分かったんだ。お父さんの命日、死んだ場所に手を合わせに行くと、どんなに朝早くても大きな花束が供えてある。多分、ううん間違いなく、日付が変わる頃に桐島のおじさんが供えてくれたんだ」

おそらく昨夜は、そこを待ち伏せされたのだ。用心深い桐島が単独行動し、襲撃を受けてなお組織に頼らなかったのは、ヤクザらしくない行為を知られたくなかったためだろう。^{こっけい}滑稽な話で

はあるが笑えはしなかった。

「さっきうちに怖そうな男の人が3人来て、お母さんがマッチに書いてあった店の名前と住所を覚えてた。あの人たち、桐島のおじさんの敵でしょ？ どうしてお母さんはあんな人たちに協力するんだ。もう桐島のおじさんを嫌っていないはずなのに。いい人だって分かってるはずなのに……」

依存しないと誓った酒を求めずにはいられなくなったとき、衝動的に酒瓶さかびんごと叩き壊してしまうこともあるだろう。手段があり、代行してくれる他者が目の前にいればなおさらだ。

「桐島のおじさんがいるのなら、危険だって、早く逃げてって……」

「承知した。確かに伝える。ただ、これだけは覚えておけ——いいヤクザなんて、映画の中にしか存在しない」

言い捨てて受話器を置いた。気配に目を向ければ、桐島がリボルバーを手に階段を下りてくる。

「2階の窓から確認した。裏口に3人張はってる」

俺もはめ殺しの小窓に歩み寄り、ロールスクリーンの際間から表を確認した。2人いる。ただし確認できただけでだ。いよいよ〈熊蔵組〉は増援体制に踏み切ったらしい。

「俺のミスだ。金を届けた相手を、てっきりおまえの〈女〉だと思い込んでいた」

「ワケありの美男美女が手に手を取り合って逃亡する——その手助けでもするつもりだったか？ お互い映画みてえなわけにはいかねえな」

「俺が表で連中を引き付ける。その際にお前は裏から逃げろ」

「余計な真似するんじゃねえ」

有無を言わせぬ桐島の声が飛んで、店を出ようとした俺は思わず動きを止めた。ヤクザの商売道具だけに、見事な恫喝どうかつだった。桐島は俺を押し退け、遮るようにドアを背に立った。

「あんたは、何者だ？」

「なに……もの……？」

「戦場を駆け巡り、素手で敵を全滅させる、伝説の戦士か。それとも街の片隅で空っぽの腹と胸を抱えた客に、食事と酒を授さずけるバーテンか」

咄嗟に答えられなかった。桐島はブランド物らしい腕時計に目をくれると、場違いに穏やかな笑みを浮かべる。

「ラスト・オーダーは？」

「まだ間に合う」

「じゃあ、マンハッタンを1杯頼むぜ。俺が撃たれたときの、気付けのためにな……それがマスター、あんたの仕事さ」

肩でドアを押し開き、飾り物のカウベルを微かに鳴らし、桐島は風の吹きすさぶ闇へ滑り出ていった。乱れた足音を背中に聞いて、俺はカウンターの内側へ戻る。

「オーダー、入りました」

ミキシング・グラスに氷を放り込み、バーボンとドライ・ベルモットを注ぎ、アロマチック・ビターズをひと振り。

風の音を裂いて銃声が響く。1発、2発。

ステアに集中した。

カウンターのカクテルグラスにマンハッタンを満たし、レッド・チェリーを飾る。

その夜、ドアのカウベルは二度と鳴らなかった。

次回予告

「友がいた。口を開けば故郷の愚痴ぐちがついて出る、そんな友だった」

夢を追い、故郷を捨てた若者が失踪しっそうした。上京した女友達はあてどなく酒場をめぐり、夢を託した仲間を探す……彼の好きだったカクテルだけを手掛かりに。

見かねたマスターが動き出した。日本ではマイナーなカクテルを好む若者にも興味があった。

だが足取りをたどるほどに、浮き彫りになる犯罪、忍び寄る陰謀いんぼう。絶体絶命のピンチから、マスターは若者を連れ帰ることができるのか？

次回『ねえ、マスター』order2 オールド・パル、ご期待ください。

「俺はまだ、オッサンじゃない！」

ねえ、マスター 1

<http://p.booklog.jp/book/74564>

著者：大城竜流

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ds-oshiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74564>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74564>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ